

教育委員会

コラム Vol.5

教育長室の窓から

和顔愛語（わがんあいご・わけんあいご）

これまで勤務した学校や行政の職場で、職員によく「和顔愛語」の話をしました。

もともとは、「無量寿経」（むりょうじゅきょう）に出てくる言葉で、「表情は、やわらかく、言葉はやさしく、相手のこころを汲み取ってよく受入れ」と訳されています。

「和顔」は、やわらかな顔。「愛語」は、やさしい言葉。つまり、文字通り、笑顔で愛情のこもった言葉です。私の経験上、学校の授業や生活の場面で、教師が仏頂面では、子どもにとって学習も楽しくありませんし、学校生活の楽しさも半減します。また、いつも難しい顔で仕事をしては効率があがりませんし、初対面の方には、得てして不快な思いをさせてしまいます。学校生活や社会生活の中で、「子どもたちが笑顔でいられること」「子どもたちが夢中になって活動できること」「子どもが多く存在を感じ取ること」そして、「子どもたちが笑顔でいること」を保証する環境の一つが、和顔愛語ではないかと思います。子どもたちの笑顔は、私たち大人や社会を元気にする力を持っています。

ところで、あらためて令和6年度の肝付町PTA連絡協議会活動の柱に、家庭教育の充実があります。主な内容は次の通りです。

- あいさつ運動の推進
- 「きもつき 80・2・30」の推進
- 「早寝早起き朝ごはん」運動
- 親と子が語り、ふれあう「家庭の日」（毎月の第3日曜日）の活動 など

これらに、和顔愛語をもって取り組んではいかがでしょうか。きっと新たな発見や新たな親子の触れ合いなどが生まれるかと思っています。



教育長の

ちょっといい話

子どもの成長

1年生という時期は、小学生になってできるようになったことを積み上げていく時期と言われています。本町の1年生も入学してから5ヶ月が過ぎ、「できなかったことができるようになった」「分からなかったことが分かった」楽しくてしょうがない姿が見られます。また、ご家庭でもちょっと内面の変化に気付くことが多いかと思っています。

ところで、「友達に優しい言葉をかけてあげられるようになった」「最後まであきらめないでできるようになった」など、内面の成長に子ども自身が気付くことも大切です。気付いていない時には、大人が声かけをしてください。子どもが自覚化することで、自信につながったり、自分のよさや可能性を認めたりできるようになります。

さて、子どもの考える力が芽生えるのは3歳と言われています。なんと大人の脳と比べて2.5倍も活潑だそうです。「自己主張が激しくなる」「想像力が発達する」「言語発達が著しい、数を数える」など、そして幼稚園への入園が可能となります。私も、自分の孫（3歳児）とたまに会うたびに成長に驚いていますが、じっくりと子どもたちの育ちと学びを見てみるのはいかがでしょうか。

本町の学校では、一人一人の子どもたちの成長・育ちに沿った教育課程を編成するとともに、日々見守ることに努めています。

